

都市や都市計画の歴史を軸に研究してきた身として、あらためて明治・大正・昭和戦前に発行された図書・雑誌類とどう接してきたのかを振り返ってみると、「古書」に対する態度にはふたつの異なった道筋があるように思える。

ひとつは、先人の考え方の中に、現代人の思考の萌芽を見いだそうという姿勢である。私にとってその好例といえる書として、椽内吉胤(とちないよしね)著『**日本都市風景**』(時潮社、1934年)がある。この本は、日本の都市景観をまとめた形で論評したおそらく最初の著作である。また、三国溱や東海道の間宿などの小都市の魅力を発見した最初の書だといえる。

たとえば、三国を歩きながら、「こうした古い街に見出す一種「調和の美」といったものが果してどうした仕組みから出発して来るものであるか」ということを点検してみると、これも、将来の街を造るの工夫をする上にも重要な暗示を持ち来すものではないだろうか」(P.211、新かなづかいに改めた)と述べているくだりなど、とても昭和初期の感覚とは思えない。この本は戦後、筑摩叢書の一冊として復刻された(1987年)ので、目にした読者もいるだろう。

もうひとつは、「古書」の中に、現代では久しく失われてしまった思想や活動などを見出すというものである。忘却の淵に沈んでしまった歴史的事実を掘り起こすことによって、現在の思想や活動もまた相対化されることになる。

私にとってこの面で思い出深い書として、史蹟名勝天然記念物保存協会の機関誌として1914年から1944年まで発行された『**史蹟名勝天然記念物**』がある。「人為の国宝」としての天然記念物(戦後は「記念物」と表記するようになった。「史蹟」↓「史跡」と同様。)が生まれる過程や天皇関係の史蹟、いわゆる「聖蹟」が生まれてくる過程が同時代史として記録されている。

並行して『歴史地理』や『史学雑誌』など、当時の有力学会誌の会員動向の欄を読み込むと、1900年代から1910年代にかけて、日本各地で「保存会」や「保勝会」が結成され、愛郷運動が勃興していたこと、そしてその時期が鉄道の建設による地域開発のタイミングと見事に一致していたことが見えてくる。こうしたことを「古書」から学ぶことは、現代人の立ち位置を明らかにすることにつながる、まことに今日的行為なのである。

## 古書から学ぶこと



神戸芸術工科大学  
教授

西村幸夫



『史蹟名勝天然記念物』  
創刊号、  
史蹟名勝天然  
記念物保存協会、1914年



『日本都市風景』  
復刻版、  
椽内吉胤、筑摩叢書、  
1987年